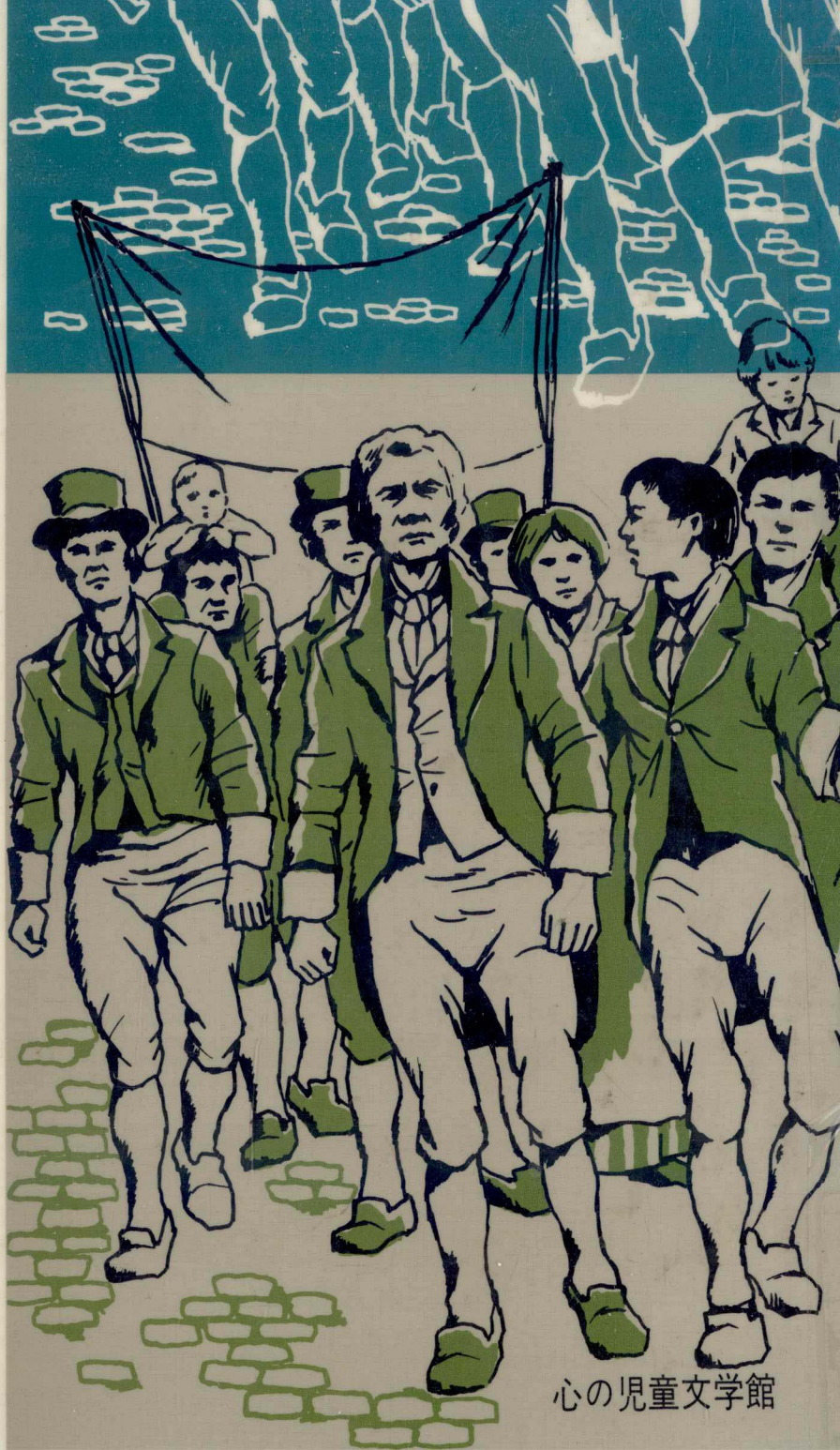


黒いランプ

ピーター・カーター 作
犬飼 和雄 訳



心の児童文学館

黒いランプ

ピーター・カーター著

いぬ かい かず を
犬飼和雄 訳

ぬぶん児童図書出版 1979

P. 280/A 5 判 (心の児童文学館シリーズ 6)

小学生上級以上～ 中学生

Peter Carter

The Black Lamp

心の児童文学館シリーズ 6

■黒いランプ■ 定価 1,300円

1979年4月5日 第1刷発行 ©

訳者 犬飼和雄

発行者 横浜市南区永田町1321

石井 満

発行所 〒101 東京都千代田区神田須田町1の18

共同ビル9F (株) マネージ内

株式会社 ぬぶん児童図書出版

電話 (03) 252-0026 振替横浜15196

印刷所 明和印刷株式会社

製本所 積信堂製本所

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

8397-10600-6602

黒いランプ

ピーター・カーター
犬飼 和雄 訳作

織工よ、パンに税金をかけられ、
織工よ、おまえはその税金にただ苦しむだけ。

「穀物条例賛歌」 E・エリオット

装丁 横溝英一

The Black Lamp by Peter Carter

Black and white illustrations by David Harris

Originally published in English under the title of The Black Lamp

© Peter Carter 1973

Illustrated by David Harris for the Oxford University Press edition

This book is published in Japan

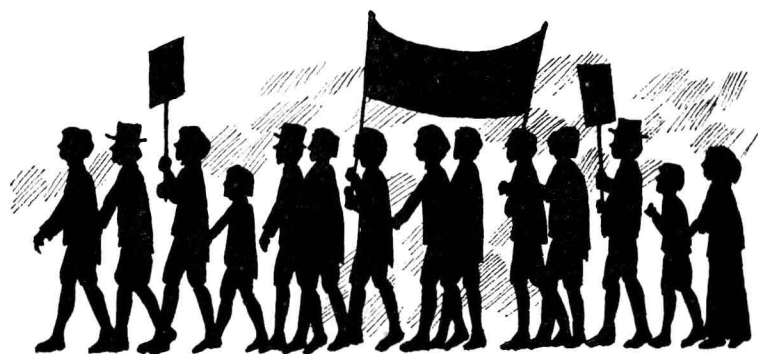
by arrangement with Oxford University Press, London.

も

く

じ

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
いよいよデモだ	ぼくは首になった	克蘭リーの正体	黒い人影	父と克蘭リー	父の秘密	戦争はおわったが	黒いランプ	水門がおそわれた	黒い煙	克蘭リーの工場	ラッドとはだれた
144	130	123	112	100	78	63	49	34	25	17	7



21	20	19	18	17	16	15	14	13
訳者あとがき	あすにむかって	克蘭リーは死んだ	エマが見つかった	ぼくがエマを助ける	逃亡 とうぼう	敵の手をのがれて	御者の裏切り ぎしや うらぎ	騎兵の襲撃 きへい しゅうげき
.....								
274	258	248	231	212	195	188	177	156

表紙・さしえ 装丁 横溝英一
デビッド・ハリス



Ⅰ ラッドとはだれだ

ぼくは一八〇三年に、ヘルムショウ村に生まれた。村はランカシャーのロセンデイル谷にあった。

この年イギリスは、フランス共和国きやうわこくと戦争せんそうをしていた。イギリス軍ぐんの赤い軍服ぐんふくは、そのころ、栄光えいこうのしるしだった。愛国者あいこくしやたちはみんな「国王ばんざい、イギリスばんざい。」と叫きけんでいた。

それでも、ぼくの父のように「国王は、イギリスは、おれたちになにをしてくれたというんだ。」という人たちもいた。そういう人たちは、フランスの革命歌かくめいか「サ・イラ」は、いままできいたどんな歌よりもりっぱだと思っていた。

ぼくの父は、ジョージ・クレックグといった。ジョージというのは、国王にちなんだつけられたものだったが、ぼくには、あのユダヤの英雄えいゆう、信仰しんようを守ってライオンのおりにはいったユダヤの英雄えいゆうだ

ニエルにちなんで、ダニエルという名をつけた。

母は、妹のエマを生んだときに死んだ。そのとき、ぼくはたったの五歳だったので、母のことはほとんどおぼえていない。母は、ハスリングデン教会墓地の、ひらたい石うすの下にうめられている。ぼくはひまがあれば、そこへいって、母の墓に花をつんでそなえた。

母が死んだから、父が、ぼくの父と母のふた役をかねなければならなかった。ぼくはといえば、エマの兄と母のふた役をかねなければならなかった。父はほかの仕事をしていたら、再婚しなければやっていけなかったと思うが、父は手織工だった。だれでも知っているように、手織工は家で仕事をする。だから父は、仕事をしながらぼくたちの面倒を見ることができた。

父は、腕のいい織工だった。ジャガード布を織る織工で、穴のあいたパンチカードをそなえた特別の織機を使って、りっぱな模様のついた高級布地を織っていた。パンチカードは織機の上につりさげられ、すきま風が吹きこむたびにゆれていた。暑い日に、カードが木の葉のようにさらさら鳴るのをきくのは、こころよかった。

父は腕がいいだけではなく、同じ年ごろの人とくらべるとかしこかった。読むのはとくいだっし、書くこともすこしはできた。父は勉強をたいへん重要視し、ぼくがまだ小さいうちに、ぼくをウオーターフートの学校へかよわせた。その学校は、セドンおばさんと呼ばれている老婦人が経営していた。そ

こでぼくも、読み書きをならい、算数を比例まで勉強し、鳥や花、五大陸と七つの海の名前をおそわった。月謝は週三ペンスだった。

いまでもぼくの頭の中では、織機の音がする。週のさいしよのうち、その音はゆったりとしたのしように「ジカンハタツプリ、ジカンハタツプリ」と声をあげていた。でも市場の日が近づくと音は変わった、「イソゲ、モウヒガナイ、イソゲ、モウヒガナイ」と叫んでいるみたいに。それというのも布が市場にまにあわないと、呉服商が買ってくれないかもしれないからだ。もつとも当時は、そんなことはめつたになかった。フランスとの戦争のおかげで、布がひどく不足していた。兵隊たちはみんな、赤い軍服がひつようだったし、水兵は青い水兵服がひつようだった。政府は、ミダス王のように、土くれにさわっては土を金にしているかのように、金をふんだんにだした。

ぼくたちの村は小さかったが、それなりに活気があったと思う。村には、ロビンフッド亭という居酒屋があった。景気がよくて、ビールばかりか本も買うことができたころ、織工たちはクラブをつくり、そこに集まっては、その日の出来事を話しあっていた。

村のすぐまえを、ベリからブラックバーンへ通じている街道が走っていた。その道をいつもだれかが歩いてた。ぼろをまとい、腹をすかした青白い顔のこじきが、照りつける太陽をあびて歩いていることもあれば、兵隊が部隊に帰ろうといそいでいることもあった。また、アイルランド人の一団が力仕事

をもとめて通ることもあった。アイルランド人たちはいつも、ほかのものにはわからないおかしなことばで冗談をいいあつては笑つてゐるようだった。ときどき、はでな軍服をまとつた、騎馬義勇兵の一隊が早足でかけぬけていった。まい週、台地のたくましい織工たちが、反物を背おつて、足をふみしめながら市場へむかつた。

ある日、そのころのぼくにはよく理解できない事件がもちあがつた。

ぼくが、九歳か十歳のときだったと思う。春だったが、天気はよくなかった。寒くてみぞれがふつていた。丘にはまだ雪が残つていたし、子羊の生まれるのが例年より遅れていた。

ぼくと妹は、その日、朝早く父に起こされた。ぼくたちが服を着、カラスムギがゆとお茶の食事をおえると、父が、谷へおりて白いサンザシの花をとれるだけとつてくるようにといった。ぼくたちは谷の森までかけおり、花を腕いっぱいかかえて、家へ持ち帰った。父はぼくたちから花を受けとると、ロビンフッド亭へでかけていった。

そこには、村人が大ぜい集まつていた。平日だというのにどうしてこんなに大ぜい集まつてゐるのかな、とぼくはふしぎに思った。村人たちは、サンザシの花を受けとると、服や帽子にさした。ぼくはいっそうふしぎに思った。いままでヘルムシヨウ村で、村人がそんなことをしたことはなかったからだ。村人たちは、ロビンフッド亭のそばをぶらぶらしていたが、どことなく変だった。みんな話もしない

でそわそわ動いていた。まるで鳥の群れが、近くに敵がいるのに感づき、まず一羽が、つづいてつぎの一羽が首をもたげ、不安そうに一、二メートルばかり飛んでは地面におりたつときみたいだった。村人たちがそんなふうに通きまわっている光景は奇妙だったが、さらに奇妙だったのは、村人たちが、くすんだ服に目のくらむようなまっ白な花をかざっていることだった。

これはどういふことかと思っていると、馬具がガチャガチャ鳴る音がし、竜騎兵の一隊が村にはいつてきた。その一隊を将校がひきいていたが、その将校は、赤い軍服に金モールをかざり、肩をいからしめていた。将校は村人が集まっているのを目にすると、いかめしい顔をした曹長をわきにしながらえ、早足にやつてきた。将校はあぶみに足をかけて立ちあがり、村人を見おろした。

「この責任者はだれだ？」と将校はいった。

それをきくと、村人は不満そうにうなり声をあげた。織工のひとり、馬のひづめにつばをはきかけた。「おれたちに責任者などいねえ。」とその織工はいった。「ここじやみんな平等なんだ。」

将校は織工を見て顔をしかめた。「きようは面倒を起こすな。」と将校はあらっぽい声でどなった。

「おれたちだつて起こしたくないんだ。」と父がいった。「だがおれたちには、好きなとき、ロビンフッド亭のそばに立っている権利があるんだ。」

将校は父のことをきくと、ちよつとあきらめたようにあたりを見まわして肩をすくめた。

「よくわかった。だがいいか、なにか面倒を起こしたら、兵隊をさしむけるぞ。」

そういうと、将校は手をふって、竜騎兵をまえにさせた。竜騎兵は村人をさえぎるように、赤い軍服の人垣をつくった。騎兵たちは、やつかいな仕事をおおせつかったというように、ふきげんな顔をしていた。でも、村人たちはおとなしかった。

そのとき、また馬のひづめの音がし、馬車がゴロゴロと重い音をたてながら、もやの中から姿をあらわした。馬車には、兵隊と役人がつきそっていた。中のひとりは騎馬義勇兵の軍服を着ていた。馬車が村の中にはいつてくると、村人たちはいつせいに、ぶうぶうと抗議の声をあげた。

馬車の中で、なにかがさつと動いたかと思うと、ひとりの男が、窓から両手をつきだした。鉄のガチャンと鳴る音がした。見ると、手錠をかけられていた。その男が、なにかひとこと叫んだ。男がなんと叫んだのかわからなかった。護衛が男をつかまえ、馬車の中にひきもどしてしまったからだ。

村人は、それを見て怒りで体をふるわせた。ふたたびみんなが、ぶうぶうわあわあ声をあげた。竜騎兵が、ガチャツとサーベルに手をかけ、馬をまえに進めて村人をさがらせた。

そのときだった、だれかがくるったようにどなった。「ラッドが、あんたを助けてくれるぞ!」

その声をきくと、騎馬義勇兵の軍服を着た役人が、ぐいと首をまわし、馬に拍車をあててまえへでた。「どなったのはどいつだ。」と役人はいった。「そんな名前をどなった悪党はどいつだ?」



だれも答えなかった。村人は、竜騎兵の赤い人垣ひらかきごしに、その役人やくにんをむつつりおし黙だまったままにらんでいた。役人やくにんがののしった。

「おまえたちはどうしてそんな勲章くんしょうをつけているんだ？」役人やくにんが勲章くんしょうといったのは、みんながつけているサンザシの花のことだった。

すると、ジェイムズ・アドズヘッドが大声でいった。ジェイムズは背せが高くたくましい織工おりこうで、父のいちばんの親友しんゆうだった。

「これは勲章くんしょうじゃねえ、花だ。」

「そうだ、それもまっ白なやつだ。」と役人やくにんがどなった。「その色がなにをあらわしているのか、なぜそんなものをつけているのか、わしが知らないとも思っているのか。そいつは謀反むはんと反逆はんぎやくの色だ。おまえたちはばかな過激派かげきはだ。そんな花はとれ！」

役人やくにんは、村人をぐるりとにらみつけた。「きいているのか。花を捨てろといっているんだ。」役人やくにんは、ジェイムズをなぐろうとするかのようにむちをふりあげた。

そのとき、父が進みでた。「おれたちは、花をつけたいと思えば、そうする。それとも、花をつけているからといって、おれたちを切り殺ころすともおっしやるんですか？」

役人やくにんはおこってまっ赤かになった。「わしにそんな口をきいてほえづらをかくなよ。」と役人やくにんはわめいた。

「わしはフレッチャ―大佐だ、ボルトン市の主席治安判事だぞ。」

父は大佐を見あげて、にんまりした。「そうですか。」と父は冷やかにいった。「ところで、おれはジョージ・クレッグというもので、ヘルムシヨウ村の植物クラブの書記でさ。」

それをきくと、村人たちはどっと笑ったが、大佐はおこつて齒をくいしばった。「おまえや、そのクラブがどんなものかわかっているぞ。おまえたちは、世間をさわがす反逆者どもだ。」

それから、父をずうずうしいのら犬めとののしった。ここまできたら、血を見ないではおさまらなかつたはずだが、ほかの役人が大佐をむこうへひっぱっていった。その役人は、大佐をむりやりひっぱりながら、手をふつて馬車を進めた。竜騎兵は、泥水をはねかえしながら、そのあとにしたがつた。みんな、やっかいな事件にまきこまれなかつたのをほっとしているようだった。

馬車の一行が村からたち去るとみんながいっせいにののしった。だれかが叫んだ。「自由だ！」そのときは、馬車も、役人も、兵隊も、もう姿が見えなかつた。

村人たちは、その場に残って話しているものもいれば、ロビンフッド亭へいったものもいた。でも父は、家へ帰った。ぼくは父のあとを走って追いかけて、馬車の中の人たちはだれか、どうして騎兵が村へきたのかときいた。父は、しばらく黙っていたが、にがにがしい声でいっきにしゃべった。

「あの人たちは、ランカスターへ連れていかれて、しばらく首にされるんだ。ボルトンの織工たちだ。む